

「伯父さんへ」

お酒が好きで、枕元にまで一升瓶を持っていったとか……そんなお酒に負けてしまった人は言うかもしれませんが、どこか飄々として面白く、「粹」にさえ私には映っていました。

いつも半被を羽織り、下は乗馬ズボンのようなニツカボツカ姿。礼服の生地で上下をそのスタイルに仕立て、結婚式でも葬式でも同じ出で立ちで、足元は決まって雪駄。最後まで独自性を崩さなかったのは立派だと思いますが、伯父さんの家族にはいろいろな面で迷惑かけまくりの人生だったかもしれません。それでも私には「変なオジサン」で憎めませんでした。ちよと普通の社会性からは遠かったかもしれませんが、見かけによらず博識で、たとえ話をしながら人生を語ったりしていましたから。

商売にはあまり向いていなかったのか伯母さんには随分と苦勞をかけたようですが、今でも元気にしていますので御安心を。

伯父さんのお葬式のこと、もちろん知らないでしょうから、すこし聞いて下さい。お坊さんの読経が流れる厳肅な中、私の後ろの方の列席者の携帯電話が突然鳴り出し、しかもその曲が「チャララーン！」ことあろうか必殺シリーズのテーマ曲！ 持ち主は相当慌てている様子でなかなか止まらない。やっと鳴りやんだと思ったら、またまた後ろの方から老婆のセリフ。

「あらら、もう死んじゃったのに。」

私は可笑しくて笑いを抑えるのに必死で、ハンカチで口をふさいでいました。それなのに、回りは誰も笑わずに、何事もなかったかのように、式は肅々と進んでいったのです。伯父さん、ごめんなさいね。

伯父さんとの最後のお別れなのに、不届きにも私は回りの人達に見破られないようにずっと笑っていたのです。でも伯父さんは、アゴのヒゲをなでながら、ニヤつとしたように思えました。